日本文学全集
3

源氏物語
下巻

与謝野晶子訳

河出書房

源氏物語 下巻

カラー版日本文学全集 3

1969©

昭和四十二年二月十日 初版発行
昭和四十四年七月十五日 七版発行

定価 七五〇円

訳者代表 与謝野晶子
発行者 中島隆之
印刷者 草刈龍平
装幀者 亀倉雄策

本文印刷 多田印刷株式会社
口絵印刷 株式会社方英社
製本 加藤製本株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
本文用紙 本州製紙株式会社
クロース 日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話 東京(292)三七一一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

源氏物語 下巻

若菜（下）……五
柏木……四一
横笛……五七
鈴虫……六四
夕霧……七〇
御法……九九
まぼろし……一〇六
雲隠れ……一二五
匂宮……一二五
紅梅……一三〇
竹河……一三六
橋姫……一四二
椎が本……一五七
総角……一七二
早蕨……二〇九
宿り木……二一六
東屋……二五二
浮舟……二七八

蜻蛉……三〇八
手習……三三一
夢の浮橋……三五九

あとがき　訳者　三六七
注釈　池田弥三郎　三六九
源氏系図　久松潜一　三七八
源氏物語年立　久松潜一　三八二
解説　池田弥三郎　四〇五

色刷口絵　源氏物語絵巻　伝藤原隆能筆
色刷挿画（カット）　新井勝利

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

源氏物語

下巻

若菜（下）

二ごころたれ先づもちてさびしくも悲
しき世をば作り初めけん　　晶子

小侍従が書いてきたことは道理に違いないが、また露骨なひどい言葉だとも衛門督には思われた。しかももうあさはかな女房などの口先だけの言葉で、心が慰められるものとは思われないのである。こんな人を中へ置かずに一言でも直接恋しい方と問答のできることは望めないのであろうかと苦しんでいた。かぎりない尊敬の念をもっている六条院*に、汚辱を加えるに等しい欲望を、こうして衛門督がいだくようになった。

三月の終る日には高官も若い殿上役人たちもみな六条院へ参った。気不精になっている衛門督は、このことをみなといっしょにするのもおっくうなのであったが、恋しい方のおいでになるところの花でも見れば、気の慰みになるかもしれぬと思って出て行った。賭弓の競技*が御所で二月にありそうでなかったうえに、三月は帝の母后の御忌月でだめであるのを残念がっている人たちは、六条院で弓の遊びが催されることを聞き伝えて例のように集って来た。左右の大将は院のご養女の婿であり、ご子息であったから列席するのがむろんで、そのために左右の近衛府の中将に競技の参加者が多くなり、小弓という定めであったが、大弓の巧者な人も来ていたために、呼び出されてそれらの手合せもあった。殿上役人でも弓の芸のできるものはみな、左右に分れて勝ちを争いながら夕にいたった。春が終る日の霞の下にあわただしく吹く夕風に桜の散り交う庭がだれの心をも引き立てて、大将たちをはじめ、すでに酔っている高官たちが、

「奥の方々からお出しになった懸賞品が、みな平凡な品でないのを、技術の専門家にだけとらせてしまうのはよろしくない。すこし純真なへた者も競争にはいりましょう」

などといって庭へおりた。このときにも衛門督が滅入ったふうでじっとしているのが、その原因を正確ではないにしても想像のできる大将の目について、困ったことである、不祥事が起ってくるのではないかと不安を感じだし、自分までも一つのもの思いのできた気がした。この二人はひじょうに仲がよいのである。大将のために衛門督が妻の兄であるというばかりでなく、古くからの友情が互いにあってむつまじい青年たちであるから、一方がなんらかの煩悶にとらえられているのを今一人が見ては、かわいそうで堪えられがたくなるのである。衛門督自身も院のお顔を見ては恐怖に似たものを感じて、はずかしくなり、誤った考えにとらわれていることはわが心ながらゆるすべきことでない、すこしのことにも人を不快にさせ、人から非難を受けることはすまいと決心している自分ではないか、ましてこれほど恐れ多いことはないではないかと、心をむちうっている人が、また慰められたくなって、せめてあのときに見た猫でも自分は得たい、人間の心の悩みが告げられる相手ではないが、寂しい自分はせめてその猫をなつけてそばに置きたいと、こんな気もちになった衛門督は、気違いじみた熱をもって、どうかしてその猫を盗み出したいと思うのであるが、それすらも困難なことではあった。

衛門督は妹の女御のところへ行って話すことで、悩ましい心をまぎらせようと試みた。貴女らしい慎み深さを多く備えた女御は、話し合っているときにも、兄の衛門督に顔を見せるようなことはなかった。きょうだいですら、われわれはこうして慣らされているのであるが、

思いがけないお顔を外にいる者へ宮のお見せになったことはふしぎなことであると、衛門督もさすがに第三者になって考えれば肯定できないこととは思われるのであるが、熱愛をもつ人に対してはそれを欠点とは見なされないのである。衛門督は東宮へ伺候して、むろんご兄弟でいらせられるのであるから似ておいでになるに違いないと思って、お顔を熱心にお見あげするのであったが、東宮ははなやかな愛嬌などはおもちにならぬが、高貴の方だけにある上品に艶なお顔をしておいでになった。帝のお飼いになる猫の幾匹かのきょうだいが、あちらこちらに分れていっている一つが、東宮のお猫にもなっていて、かわいい姿で歩いているのを見ても、衛門督には恋しい方の猫が思い出されて、「六条院の姫宮の御殿におりますのはよい猫でございます。珍しい顔でして、感じがよろしいのでございます。私はちょっと拝見することができました」

こんなことを申しあげた。東宮は猫がひじょうにお好きであらせられるために、くわしくおたずねになった。

「支那の猫でございまして、こちらの産のものとは変っておりました。みな同じように思えば同じようなものでございますが、性質のやさしい人なれた猫と申すものはよろしいものでございます」

こんなふうに、宮がお心をお動かしになるようにばかり衛門督は申すのであった。

あとで東宮は淑景舎の方の手から所望をおさせになったために、女三の宮から唐猫が献上された。噂されたとおりに美しい猫であるといって、東宮の御殿の人々はかわいがっているのであったが、衛門督は、東宮はたしかに興味をおもちになっておとり寄せになりそうであると観察していたことであったから、猫のことを知りたく思って幾日かののちに、また参った。まだ子どもであったときから朱雀院が特別にお愛しになってお手もとでお使いになった衛門督であって、院が山の寺へおはいりになってからは、東宮へもよくうかがって敬意を表していた。琴などご教授をしながら、衛門督は、

「お猫がまたたくさん参りましたね。どれでしょう、私の知人は」

といいながら、その猫を見つけた。ひじょうに愛らしく思われて衛門督は手でなでていた。宮は、

「実際、容貌のよい猫だね。けれど私にはなつかないよ。人見知りをする猫なのだね。しかし、これまで私の飼っている猫だってたいしてこれには劣っていないよ」

とこの猫のことを仰せられた。

「猫は人を好ききらいなどあまりせぬものでございますが、しかし、賢い猫にはそんな知恵があるかもしれません」

などと衛門督は申して、また、

「これ以上のが、おそばにいくつもいるのでございましたら、これはしばらく私にお預からせください」

こんなお願いをした。心の中では愚かしい行為をするものであるという気もしているのである。

けっきょく、衛門督は望みどおりに女三の宮の猫を得ることができて、夜などもそばへ寝させた。夜が明けると猫を愛撫するのに時を費す衛門督であった。人なつきの悪い猫も衛門督にはよくなれて、どうかすると着物の裾へまつわりにきたり、からだをこの人に寄せて眠りにきたりするようになって、衛門督はこの猫を心からかわいがるようになった。もの思いをしながら顔をながめ入っている横で、にょうにょうとかわいい声で鳴くのをなでながら、愛におごる小さき者よと衛門督はほほえまれた。

「恋ひわぶる人の形見と手ならせば
　汝よ何とて鳴く音なるらん

これも前世の約束なんだろうか」

顔を見ながらこういうと、いよいよ猫は愛らしく鳴くのを懐中に入れて衛門督はもの思いをしていた。女房などは、

「おかしいことですね。にわかに猫をご寵愛されるではありませんか。ああしたものには無関心だった方がね」

と不審がってささやくのであった。東宮からおとり戻しの仰せがあっても、衛門督はお返しをしないのである。お預かりのものをとり込んで、自身の友にしていた。

左大将夫人の玉鬘の尚侍は真実の兄弟に対するよりも右大将に多く兄弟の愛をもっていた。才気のある、はなやかな性質の人で、源大将の訪問を受けるときにもむつまじいふうにとり扱って、昔のとおりに親しく語ってくれるため、大将も淑景舎の方の羞恥をすくなくしてうちとけようとする気もちのないようなのにくらべて、風変りな兄弟愛の満足がこの人から得られるのであった。左大将は月日に添えて玉鬘を重んじていった。もう前夫人はだんぜん離別してしまって、尚侍が唯一の夫人であった。この夫人から生れたのは男の子ばかりであるため、左大将はそれだけをものたらず思い、真木柱の姫君を引きとって手もとへ置きたがっているのであるが、祖父の式部卿の宮がご同意をあそばさない。

「せめてこの姫君にだけは、人からそしられない結婚を自分がさせてやりたい」

といっておいでになる。帝は御伯父のこの宮に深いご愛情をおもちになって、宮から奏上されることにお背きになることはおできにならないふうであった。もとからはなやかなご生活をしておいでになって、六条院、太政大臣家につづいての権勢の見えるところで、世間の信望も得ておいでになった。左大将も第一人者たる将来が約束されている人であったから、式部卿の御孫女、左大将の長女である姫君を人は重く見ているのである。求婚者がいろいろな人の手を通じて来てすでに多数に及んでいるが、宮はまだだれを婿にと選定されるふうもなかった。かれにその気があればと宮が心でお思いになる衛門督は、猫ほどにも心をひかぬのかまったくの知らず顔であった。左大将の前夫人は今も病的な、陰気な暮しをつづけて、若い貴女のために朗かな雰囲気を作ろうとする努力もしてくれないために、姫君は寂しがって、人づてに聞く継母の生活ぶりに憧れをもっていた。こうした明るい娘なのである。

兵部卿の宮は今もご独身で、熱心にお望みになった相手はみなほかへとられておしまいになる結果になって、世間体もはずかしくお思いになるのであったが、この姫君に興味をお感じになり、縁談をお申し入れになると、式部卿の宮は、

「私はそう信じているのだ。だいじに思う娘は宮仕えに出すことを第一として、つづいては宮たちと結婚させることがいいとね。普通の官吏と結婚させるのをたのもしいことのように思って、親たちが娘の幸福のためにそれを願うのはいやしい態度だ」

とおいいになって、あまり求婚期間の悩みもおさせにならずにご同意になった。兵部卿の宮はこのむぞうさな定まり方をものたらぬようにもお思いになったが、軽蔑しがたい相手であったから、ずるずる延ばしで話の解消をお待ちになることもおできにならないで、通って行くようにおなりになった。式部卿の宮はこの婿の宮をだいじにあそばすのであった。宮は幾人もの女王をおもちになって、その宮仕え、結婚の結果によって苦労されることの多かったのに懲りておいでになるはずであるが、最愛の御孫女のためにまたこうした婿かしずきをお始めになったのである。

「母親は時がたつにしたがって病的な女になるし、父親はそちらの意志にしたがわない子だといって、そまつに見ている姫君だからかわいそうでならぬ」

などとおいいになって、新夫婦の居間の装飾までもご自身で手を下してなされたり、またお指図をされたりもするのであった。兵部卿の宮はお亡くしになった先夫人をばかり恋しがっておいでになって、その人に似た新婦を得たいと願っておいでになったために、この姫君を、悪くはないが似たところがないとごらんになったせいか、通っておいでになるのにおっくうなふうをお見せになった。式部卿の宮は失望あそばした。病人である母君も気分の常態になっているときには、この娘の思うようでない結婚を嘆いて、いよいよ人生をいやなものにきめ

てしまった。父親の左大将もこの話を聞いて、自分のあやぶんだとおりの結果になったではないか、多情者の宮様であるからと思って、はじめから自分が賛成しなかった婿であったから困ったことであると嘆いていた。玉鬘夫人は宮の御情の薄さを継娘の不幸として聞いていながら、自分がもし結婚をしてそうした目に会っていたなら、六条院の人々へも、実父の家族へも、不名誉なことになるのであったと思った。そして左大将の妻になった運命を悲しむ気もなくなり、継娘にかぎりなく同情した。その自分の処女時代にも兵部卿の宮を良人にしようとはすこしも思わなかった。ただあれだけの情熱を運んでくだすった方が、左大将と平凡な夫婦になってしまったことを軽蔑しておいでにならないかと、それ以来はずかしく思っていたのであると玉鬘夫人は思い、その宮が継娘の婿におなりになって、自分のことをどう聞いておいでになるであろうと思うと、晴れがましいような気もするのであった。この夫人からも新婚した姫君の衣裳その他の世話をした。前夫人がどう恨んでいるかというようなことは知らぬふりにして、長男、次男を中にして好意を寄せる尚侍に、前夫人は友情をすら覚えているのであるが、式部卿の宮家には大夫人という性質の曲った人が一人いて、この人は常にだれのことも恨んで、罵言をやめないのである。

「親王方というものは一人だけの奥様をだいじになさるということで、派手な生活のできないおぎないにもなろうというものだのに」

と陰口をするのが兵部卿の宮のお耳にはいったとき、不愉快なことを聞く、自分に最愛の妻があった時代にも他との恋愛の遊戯はやめなかった自分も、こうまでひどい恨み言葉は聞かないでいたとお思いになって、いっそう亡き夫人を恋しく思召すことばかりがつのって、自邸で寂しくもの思いをしておいでになる日が多かった。そうはいうものの二年もその状態でつづいてきた今では、ただそれだけの淡い関係の夫婦としてすんでいった。

歳月がかさなり、*帝が即位をあそばされてから十八年になった。

「将来の天子になる子のないことで自分には人生が寂しい。せめて気楽な身の上になって、自分の愛する人たちとしじゅう出会うこともできるようにして、私人として楽しい生活がしてみたい」

以前からよくこう帝は仰せられたのであったが、重くご病気をあそばされたときに、にわかに譲位をおこなわせられた。世人は盛りの御代をお捨てあそばされることを残念がって嘆いたが、東宮ももうおとなになっておいでになったから、お変りになっても特別変ったこともなかった。ゆるぎない大御代と見えた。太政大臣は関白職の辞表を出して自邸を出なかった。

「人生のたのみがたさから賢明な帝王さえ御位をお去りになるのであるから、老境に達した自分が挂冠するのに惜しい気もちなどはすこしもしない」

といっていたに違いない。左大将が右大臣になって関白の仕事もした。御母君の女御は新帝の御代を待たずに亡くなっていたから、后の位におあがれになっても、それはもうものの背面のことになって寂しく見えた。六条の女御のお生みした今上第一の皇子が東宮におなりになった。そうなるはずのことはだれも知っていたが、目前にそれがあらわれてみればまた一家の幸福さに驚きもされるのであった。右大将が大納言を兼ねて順序のままに左大将に移り、この人も幸福に見えた。六条院は、ご譲位になった冷泉院にご後嗣のないのを御心の中では遺憾に思召された。実は新東宮だって六条院のご血統なのだが、冷泉院のご在位中にはご煩悶もなくてすごされたほど、例の密通の秘密はかくしおおされたが、そのかわりにこのご系統が末までつづかぬように運命づけられておしまいになったのを六条院は寂しくお思いになったが、ご口外あそばすことでもないのでただお心で味気なくお感じになるだけであった。東宮の御母女御は皇子たちが多くお生れになって帝のご寵はますます深くなるばかりであった。またも王氏の人が后にお立ちになることになっていることで、今度で三代にもなっていたから、何かとあきたらぬらしい世論があるのをお知りになったとき、冷泉院の中宮は以前もこうした場合に六条院の強い支持があって、自

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

分の后の位は定まったのであると過去を回想あそばして、ますます院の恩をお感じになった。

冷泉院の帝はご期待あそばされたとおりに、ごきゅうくつなお思いもなしに御幸などもおできになることになって、あちらこちらとご遊幸あそばされて、今日のご境遇ほどお楽しいものはないようにお見受けされるのであった。帝は六条院においでになる御妹の姫宮に深い関心をおもちになったし、世間がその方にはらう尊敬も大きいのであるが、なお紫夫人以上の夫人として、六条院のご寵を受けておいでになるのではなかった。年月のたつにしたがって女王と宮の御中にこまやかな友情が生じて、六条院の中は理想的なおだやかな空気に満たされているが、紫夫人は、

「もう私はこうした出入りの多い住居から退きまして、静かな信仰生活がしたいと思います。人生とはこんなものということも経験してしまったような年齢にもなっているのですもの、もう尼になることをゆるしてくださいませんか」

と、時々まじめに院へお話しするのであるが、

「もってのほかですよ。そんな恨めしいことをあなたは思うのですか、それは私自身が実行したいことなのだが、あなたがあとに残って寂しく思ったり、私といっしょにいるときと違った世間の態度を、悲しく感じたりすることになってはという気がかりがあるために現状のままでいるだけなのですよ。それでもいつか私の実行の日がくるでしょうから、あなたはその後のことになさい」

などとばかり院はおいいになって、夫人の志をさまたげておいでになった。女御は今も女王を真実の母として敬愛していて、明石夫人は隠れた女御の後見をするだけの人になって謙遜さを失わないでいることは、かえって将来のためにたのもしく思われた。尼君もうれし泣きの涙を流す日が多くて、目もふきただれて幸福な老婆の見本になっていた。

住吉の神への願はたしを思い立って参詣する女御は、以前に入道から送ってきてあった箱をあけて、神へ約した条件を調べてみたが、それにはかなりおおがかりなことを多く書きたててあった。年々の春秋の神楽とともに必ず長久隆運の祈りをすることなどは、今日の女御の境遇になっていなければ実行のできぬことであった、ただ走り書きにした文章にも入道の学問と素養が見え、仏も神も聞き入れるであろうことが明らかに知られた。どうしてそんな世捨人の心にこんな望みの楼閣が建てられたのであろうと、子孫への愛の深さが思われもし、神や仏にすまぬ気もされた。並の人ではなくてしばらく自分の祖父になってこの世へ姿を現わしただけの、功徳を積んだ昔の聖僧ではなかったかなどと思われ、女御に明石の入道を畏敬する心が起った。今度はまだ女御のおこなうことにはせずに、六条院の参詣におつれになる形式で京を立ったのであった。

須磨明石時代に神へお約しになったことは次々にはたされたのであるが、その以後もまた長く幸運がつづき、一門子孫の繁栄をごらんになることによっても神の冥助は忘られずに、六条院は紫の女王も伴ってご参詣あそばされるのであって、はなやかな一行である。簡素を旨として国の煩いになることはお避けになったのであるが、このご身分であっては、あるところまでは必ず備えられねばならぬ旅の形式があって、自然に大きなことにもなった。公卿も二人の大臣以外は全部供奉した。神前の舞人は、各衛府の次将たちの中の容貌のよいのを、さらに背丈をそろえてとられたのであった。落選して嘆く風流公子もあった。奏楽者も石清水や加茂の臨時祭に使われる専門家がよりととのえられたのであるが、ほかから二人加えられたのは近衛府の中で音楽のじょうずとして有名になっている人であった。また、神楽の方を受けもつ人も多数に行った。宮中、院、東宮の殿上役人がみなご命令によって供奉の中にいるのも無数にあった。華奢を尽した高官たちの馬、鞍、馬添い侍、随身、小侍の服装までもきらびやかな行列であった。院のお車には紫夫人と女御をいっしょに乗せておいでになって、次の車には明石夫人とその母の尼とが目立たぬふうに乗ってい

た。それには古い知り合いの女御の乳母が陪乗したのである。女房たちの車は夫人づきの者のが五台、女御のが五台、明石夫人に属したのが三台で、それぞれに違った派手な味のある飾りと服装が人目にたった。明石の尼君がいっしょに来たのは、

「今度の参詣に尼君を優遇して同伴しよう。老人の心に満足ができるほどにして」

と院がおいいだしになったのであって、はじめ明石夫人は、

「今度は院と女王様が主になってのご参詣なんですから、あなたなどがまじっておいでになっては私の立場も苦しくなりますからね、女御さんがもう一段ご出世をなすったあとで、そのときに私たちだけでおまいりをいたしましょう」

といって、尼君をとどめていたのであるが、老人はそれまで長命で生きておられる自信もなく心細がってそっと一行に加わって来たのである。運命の寵児であることがしかるべきことと思われる女王や女御よりも、明石の母と娘の前生の善果がこの日ほどあざやかに見えたこともなかった。

十月の二十日のことであったから、中の忌垣にはう葛の葉も色づくときで、松原の下の雑木の紅葉が美しく波の音だけ秋であるともいわれない浜のながめであった。本格的な支那楽高麗楽よりも東遊び*の音楽の方がこんなときにはぴったりと、人の心にも波の音にもあっているようであった。高いこずえでなる松風の下で吹く笛の音もほかの場所で聞く音とは変って身にしみ、松風が琴にあわせる拍子は鼓を打ってするよりも柔らかで、そして寂しくおもしろかった。伶人の着けた小忌衣の竹の模様と松の緑がまじり、挿頭の造花は秋の草花といっしょになったように見えるが、「求子」の曲が終りに近づいたときに、若い高官たちが正装の袍の肩をぬいで舞の場へ加わった。黒の上着の下から臙脂紅紫の下襲の袖をにわかに出し、それからまた下の袍の赤い袂の見えるそれらの人の姿を、通り雨がすこしぬらしたときには、松原であることも忘れて紅葉のいろいろが散りかかるように思われた。その派手な姿に白くほおけた荻の穂をさしてほんの舞の一節だけを見せてはいったのがきわめておもしろかった。

院は昔を追憶しておいでになった。中途で不幸な日のあったことも目の前のことのように思われて、それについては語る人もおもちにならぬ院は、関白を退いた太政大臣を恋しく思召された。車へお帰りになった院は第二の車へ、

たれかまた心を知りて住吉の
神代をへたる松にこと問ふ

という歌を懐中紙に書いたのをもたせておやりになった。尼君は心を打たれたようにしおれてしまった。今日のはなやかな光景を見るにつけても、明石を源氏のお立ちになったころの嘆かわしかったこと、女御が幼児であったころにした悲しい思いが追想されて、運命にめぐまれていることを知った。そしてまた山へはいった良人も恋しく思われて、涙のこぼれる気もちをおさえて、

住の江を生けるかひある渚とは
年ふるあまも今日や知るらん

と書いた。お返事がおそくなっては見苦しいと思い、感じたままの歌をもってしたのである。

昔こそ先づ忘られね住吉の
神のしるしを見るにつけても

とまた独言もしていた。一行は終夜を歌舞に明かしたのである。二十日の月の明りではるかに白く海が見え渡り、霜が厚く置いて松原の昨日とは変った色にも寒さが感じられて、快く身にしむ社前の朝ぼらけであった。自邸での遊びには慣れていても、あまり外の見物に出ることを好まなかった紫の女王は京の外の旅もはじめての経験であったし、すべてのことが興味深く思われた。

住の江の松に夜深く置く霜は
神の懸けたる木綿かづらかも

紫夫人の作である。小野篁の「比良の山さへ」と歌った雪の朝を思

ってみると、奉った祭を神が嘉納された証の霜とも思われてたのもしいのであった。

女御、
　神人の手に取り持たる榊葉に
　　木綿かけ添ふる深き夜の霜
中務の君、
　祝子が木綿うち紛ひ置く霜は
　　実にいちじるき神のしるしか

そのほかの人々からも多くの歌は詠まれたが、書いておく必要がないと思って筆者ははぶいた。こんな場合の歌は文学者らしくしている男の人たちの作も、平生よりできの悪いのが普通で、松の千歳から解放されて心の琴線に触れるようなものはないからである。

朝の光がさしのぼるころにいよいよ霜は深くなって、夜通し飲んだ酒のために神楽の面のようになった自身の顔も知らずに、もう篝火も消えかかっている社前で、まだ万歳万歳と榊を振って祝い合っている。この祝福は必ず院のご一族の上に形となって現われるであろうと、ますますはなばなしく未来が想像されるのであった。ひじょうにおもしろくて千夜の時のあれと望まれた一夜がむぞうさに明けていったのを見て、若い人たちは渚の帰る波のようにここを去らねばならぬことを残念がった。はるばると長い列になって置かれた車の、垂絹の風に開く中から見える女衣裳は花の錦を松原に張ったようであったが、男の人たちの位階によって変った色の正装をして、美しい膳部を院のお車へ運びつづけるのが布衣たちにはひじょうにうらやましく見られた。明石の尼君の分も浅香の折敷に鈍色の紙を敷いて精進物で、院のご家族並に運ばれるのを見ては、

「すばらしい運をもった女というものだね」

などと彼らは仲間でいい合った。おいでになったときは神前へささげられる、もち運びのめんどうな物を守る人数も多くて、途中の見物もじゅうぶんにおできにならなかったのであったが、帰途は自由なおもしろい旅をされた。この楽しい旅行に山へはいりきりになった入道をあずからせることのできなかったことを、院はものたらず思召されたが、それまではむりなことであろう。実際、老入道がこの一行に加わっているとしたら見苦しいことでなかったであろうか。その人の思いあがった空想がことごとく実現されたのであるから、だれも心は高くもつべきであると教訓されたようである。いろいろな話題になって明石の人たちがうらやまれ、幸福な人のことを明石の尼君という言葉も流行った。太政大臣家の近江の君は双六の勝負の賽を振る前には、

「明石の尼様、明石の尼様」

と呪文を唱えた。

法皇は仏勤めに精進あそばされて、政治のことなどにはなんの干渉もあそばさない。春秋の行幸をお迎えになるときにだけ、昔のご生活がお心の上に姿を現わすこともあるのであった。女三の宮をなお気がかりに思召されて、六条院は形式上の保護者と見て、内部からの保護を帝にお託しになった。それで女三の宮は二品の位におあげられになって、えさせられる封戸の数も多くなり、いよいよはなやかなお身の上になったわけである。紫夫人は一方の夫人の宮がこんなふうに年月に添えて勢力の増大していくのに対して、自分はただ院のご愛情だけを力にして今のところは負目がないとしても、そのお志というものもついには衰えるであろう、そうした寂しいときに会わない前に今のうちに善処したいとは常に思っていることであったが、あまりに賢がるふうに思われては、という遠慮をしてロへたびたびは出さないのである。院は法皇だけでなく帝までが関心をおもちになるということがおそれ多く思召されて、冷淡にする噂を立てさすまいというお心から、今ではあちらへおいでになることと、こちらにおられることとがちょうど半々ほどになっていた。道理なこととは思いながらもかねて思ったとおりの寂しい日のきはじめたことに女王は悲しまれたが、表面は冷静に以前のとおりにしていた。東宮に次いでお生れになった女一の宮を、紫夫人は手もとへお置きしてお育て申しあげていた。その

お世話の楽しさに院のお留守の夜の寂しさも慰められているのであった。御孫の宮はどの方をもみなひじょうにかわゆく夫人は思っているのである。花散里夫人は、紫夫人も明石夫人も御孫宮方のお世話に没頭しているのがうらやましくて、左大将の典侍に生ませた若君を懇望して手もとへ迎えたのを愛して育てていた。美しい子で利口なこの孫君を院もおかわいがりになった。院は御子の数がすくないように見られた方であるが、こうして広く繁栄する御孫たちによって満足をしておいでになるようである。右大臣が院を尊敬して親しくお仕えすることは昔以上で、玉鬘ももう中年の夫人になり、何かのときには六条院へたずねて来て紫夫人にも会って話し合うほかにも、親しみ深い往来がしじゅうあった。姫宮だけは今日もなお少女のようなたよりなさで、また若々しさでおいでになった。もう宮廷の人になりきってしまった女御に気遣いがなくおなりになった院は、この姫宮を幼い娘のように思召して、この方の教育に力を傾けておいでになるのであった。

朱雀院の法皇は、もうご命数もすくなくなったように心細くばかり思召されるのであるが、この世のことなどはもうかえりみないことにしたいとお考えになりながらも、女三の宮にだけはもう一度お会いあそばされたかった。このまま亡くなって心の残るのはよろしくないことであるから、たいそうにはせず、宮がたずねておいでになることをおいいやりになった。院も、

「ごもっともなことですよ。こんな仰せがなくともこちらから進んでおうかがいをなさらなければならないのに、ましてこうまでお待ちになっておられるのだから、実行しないではお気の毒ですよ」

とおいいになり、機会をどんなふうにして作ろうかと考えておいでになった。なんでもなくそっと伺候をするようなことはみすぼらしくてよろしくない、法皇をお喜ばせかたがた、外見のととのったことがさせたいとお思いになるのである。来年法皇は五十におなりになるのであったから、若菜の賀を姫宮から奉らせようかと院はお思いつきになって、それに付帯した法会の布施にお出しになる法服の仕度をおさせになり、すべて精進でされるご宴会の用意であるから普通のことと変って、苦心のはらわれることを今からお指図になっていた。昔から音楽がことにお好きな方であったから、舞の人、楽の人にすぐれたのを選定しようとしておいでにもなった。右大臣家の下の二人の子、大将の子を典侍腹のも加えて三人、そのほかの御孫も、七歳以上のはみな殿上勤めをさせておいでになった。それらと、兵部卿の宮のまだ元服前の王子、そのほかの親王方の子息、ご親戚の子どもたちを多く院はお選びになった。殿上人たちの舞手も容貌がよくて芸のすぐれたのを選り調えて多くの曲の用意ができた。ひじょうな晴れな場合と思って、その人たちは、稽古を励むために師匠になる専門家たちは、舞の方のも楽の方のも繁忙をきわめていた。女三の宮は琴の稽古を御父の院のお手もとでしておいでになったのであるが、まだ少女時代に六条院へお移りになったために、どんなふうにその芸はなったかと法皇は不安に思召して、

「こちらへ来られたときに宮の琴の音が聞きたい。あの芸だけはしあげたことと思うが」

といっておいでになることが、宮中へも聞えて、

「そういわれるのは、けっして平凡なお手並でない芸にちがいない。一所懸命に法皇の所へ来てお弾きになるのを自分も聞きたいものだ」

などと仰せられたということがまた六条院へ伝わってきた。院は、

「今までも何かの場合に自分からも教えているが、質はすぐれているがまだたいした芸になっていないのを、何心なくおうかがいされたときに、ぜひ弾けと仰せになった場合に、はずかしい結果を生むことになってはならない」

とおいいになって、それから女三の宮に熱心な琴の教授をお始めになった。変ったものを二三曲、また大曲の長いのが四季の気候によって変る音、寒いときと空気のあたたかいときによっての弾き方を変えねばならぬことなどの特別の奥義をお教えになるのであったが、はじめはたよりないふうであったものの、お心によくはいってきてじょうず

におなりになった。昼は人の出入りの物音の多さにさまたげられて、絃をゆすったり、おさえて変る音の繊細な味を研究おさせになるのに不便なために、夜になってから静かに教うべきであるとおいいになって、女王の了解をお求めになって、院はずっと宮の御殿の方へお泊りきりになり、朝夕のお稽古の世話をあそばされた。女御にも女王にも琴はお教えにならなかったのであったから、このお稽古のときに珍しい秘曲もお弾きになるのであろうことを予期して、女御も得ることの困難なお暇を、ようやくしばらく得て帰邸したのであった。もう皇子を二人おもちしているのであるが、また妊娠して五月ほどになっていたから、神事の多い季節はご遠慮したいといって、お暇を願ってきたのである。

十一月が過ぎると戻るようにと宮中からのご催促が急であるのもさしおいて、このごろの楽の音のおもしろさに女御は六条院を去りがたいのであった。なぜ自分には教えていただけなかったのかと、院を恨めしくお思いもしていた。普通と変って冬の月をもっともお好みになる院は、雪のある月夜にふさわしい琴の曲をお弾きになって、女房の中の楽才のあるのに、他の楽器で合奏をさせたりして楽しんでおいでになった。

年末などはことに対の女王が忙しくていっさいの心配りのほかに、女御、宮たちのための春の仕度に追われて、

「春ののどかな気分になった夕方などにこの琴の音をよくお聞きしたい」

などといっていたが年も変った。

年の初めに、まず帝からのはなやかな御賀を法皇はお受けになることになっていて、差し合ってはよろしくないと院は思召し、すこしたった二月の十幾日のころと姫宮の奉られる賀の日をお定めになり、楽の人、舞手はしじゅう六条院へ来てその下稽古を熱心にする日が多かった。

「対の女王がいつもお聞きしたがっているあなたの琴と、その人たちの十三絃や琵琶を一度合奏する女ばかりの催しをしたい。現代の大家といっても私の家族たちの音楽に対する態度より純真なものをもっていませんよ。私はたいした音楽者ではないが、すべての芸に通じておきたいと思って、少年のときから世間の専門家を師にしてつきもしたし、また貴族の中の音楽の大家たちにも教えを請うたものですが、特に尊敬すべき芸をもった人と思われるのはなかった。その時代よりもまた現在では音楽をやる人の素質が悪くなって、芸が浅薄になっていると思う。琴などはまして稽古をする者がなくなったということですから、あなただけ弾ける人はあまりないでしょう」

と院がおいいになると、宮は無邪気にほほえんで、自分の芸がこんなにも認められるようになったかと喜んでおいでになった。もう二十一二でおありになるのであるが、まだ幼稚なところが抜けないで、そして見たお姿だけは美しかった。

「長くお目にかからないでおいでになるのだから、おとなになってりっぱになったと認めていただけるようにして、お目にかからなければいけませんよ」

と事に触れて院は教えておいでになるのであった。実際こうした良人がおいでにならなければ、外間のいろいろな噂にさえされる方であったかもしれぬと女房たちは思っていた。

一月の二十日過ぎにはもうよほど春めいてぬるい微風が吹き、六条院の庭の梅も盛りになっていった。そのほかの花の木も明日の約されたような力が見えて、杜はかすみ渡っていた。

「二月になってからでは賀宴の仕度で混雑するであろうし、こちらだけですることもそのときの下調べのように思われるのも不快だから、今のうちがよい、あちらで会をなさい」

と院はおいいになって、女王を寝殿の方へお誘いになった。供をしたいという希望者は多かったが、寝殿の人と知り合いになっている以外の人は残された。すこし年はいっている人たちであるが、りっぱな女房たちだけが夫人に添って行った。童女は顔のいい子が四人ついて行

った。朱色の上に桜の色の汗衫を着せ、下には薄色の厚織の袿、浮模様のある表袴、膚には槌の打目のきれいなのをつけさせ、身の姿態も優美なのが選ばれたわけであった。女御の座敷の方も春の新しい装飾がしわたされてあって、華奢を尽した女房たちの姿はめざましいものであった。童女は臙脂の色の汗衫に、支那綾の表袴で、袿は山吹色の支那錦のそろいの姿であった。明石夫人の童女は目立たせないような服装をさせて、紅梅色を着た者が二人、桜の色が二人で、下はみな青色を濃淡にした袿で、これも打目のできあがりのよいものを下につけさせてあった。姫宮の方でも女御や夫人たちの集る日であったから、童女の服装はことによくさせておきになった。青丹の色の服に、柳の色の汗衫で、赤紫の袿などは普通の好みであったが、なんとなく気高く感ぜられることは疑いもなかった。縁側に近い座敷の襖子をはずして、貴女たちの席は几帳を隔てにしてあった。中央の室には院の御座が作られてある。今日の拍子合せの笛の役には子どもを呼ぼうとおいいになって、右大臣家の三男で玉鬘夫人の生んだ上の方の子が笙の役をして、左大将の長男に横笛の役を命じ縁側へ置かれてあった。演奏者の茵がみな敷かれて、その席へ院のご秘蔵の楽器が紺錦の袋などから出されて配られた。明石夫人は琵琶、紫の女王には和琴、女御は箏の十三絃である。宮はまだ名楽器などはお扱いがたいであろうと、平生弾いておいでになるので調子を院がお弾き試みになったのをお配らせになった。院は、

「箏の琴は絃がゆるむわけではないが、他の楽器と合せるときに琴柱の場所が動きやすいものなのだから、はじめからその心得でいなければならないが、女の力ではじゅうぶん締めることがむつかしいであろうから、やはりこれは大将にたのまなければなるまい。それに拍子を受持っている少年たちもあまり小さくて信用のできない点もあるから」

とお笑いになりながら、

「大将にこちらへ」

とお呼び出しになるのを聞いて、夫人たちははずかしく思っていた。明石夫人以外はみな院の御弟子なのであるから、院も大将が聞いて難のないようにとできばえを祈っておいでになった。女御は平生から陛下の前で他の人と合奏もし慣れているから、だいじょうぶおちついた演奏はできるであろうが、和琴というものはむつかしいものでなく、定まったことがないだけ創作的の才が必要なのを、女の弾き手はもてあましはせぬか、春季の絃楽は皆しっくり他に合っていかねばならぬものであるが、和琴がうまくいっしょになっていかぬようなことはないかとも、損な弾き手に同情もしておいでになった。

左大将は晴れがましくて、音楽会のいかなる場合に立ち会うよりも気の遣われるふうで、きれいな直衣を薫香の香のよく染んだ衣服に重ねて、なおも袖を焚きしめることを忘れずに、ととのった身なりのこの人が現われて来たころはもう日が暮れていた。感じのよい早春の黄昏の空の下に梅の花は旧年に見た雪ほどたわわに咲いていた。ゆるやかな風の通りかようごとに、御簾の中の薫香の香も梅花の匂いを助けるように吹き迷って、鶯を誘うかと見えた。御簾の下の方から箏の琴のさきの方をすこしお出しになって、院が、

「失礼だが、この絃の締まりぐあいをよく見て調音をしてほしい。他人に来てもらうことのできない場合だから」

とおいいになると、大将はうやうやしく琴を受けとって、壱越調の音に発の絃の標準の柱をおき、全体を弾き試みることはせずに、そのまま返そうとするのを院はごらんになって、

「調子をつけるだけの一弾きは気どらずにすべきだよ」

と院がおいいになった。

「今日の会に、私がいささかでも音をまぜますようなだいそれた自信はもっておりません」

大将は遠慮してこういう。

「もっともだけれど、女だけの音楽に引きさがった、逃げたといわれるのは不名誉だろう」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com